

あった。診断精度は、HPV検査の感度85.4%、特異度89.7%、陽性反応適中度71.6%で、細胞診はそれぞれ88.8%、90.7%、74.3%であった。ただし、HPV検査は施行全例に対し、細胞診検査はスクリーニングされた症例が含まれている。

【結論】子宮頸部腫瘍のHPV検査は、頸管粘液の多い腺癌や特殊組織型の場合に限界を示した。

## 9 センチネルリンパ節生検を施行した悪性黒色腫症例の検討

竹之内辰也・高橋 明仁

県立がんセンター新潟病院皮膚科

当院では2002年から悪性黒色腫に対して色素とラジオアイソトープの併用によるセンチネルリンパ節(SLN)生検を導入しており、その転移の有無によってリンパ節郭清の適応を決定している。2006年までの5年間にSLN生検を施行した悪性黒色腫47例の発生部位は、頭頸部4例、体幹8例、手5例、足19例、四肢(手足以外)11例であった。47例中SLNに転移を認めたのは14例(30%)で、T分類別にみるとTis~T2は0%、T3は33%、T4は61%であり、原発巣の厚さ(tumor thickness)によって転移率が増していた。

SLN転移陽性にて根治的リンパ節郭清を施行した14例の内、残りの所属リンパ節に転移を認めたのは3例(21%)のみであった。SLN生検の今後の課題としては、T分類に基づく層別化によるSLN生検の適応決定や、SLN転移陽性の際の郭清適応症例の選別などが挙げられる。

## 10 肺癌に対するNovalisを使用した体幹部定位放射線治療の初期治療成績

松本 康男・杉田 公・横山 晶\*  
 塚田 裕子\*・前田 恒治\*・長澤 芳哉\*  
 小池 輝明\*\*・大和 靖\*\*  
 吉谷 克雄\*\*・保坂 靖子\*\*  
 県立がんセンター新潟病院放射線科  
 同 内科\*  
 同 呼吸器外科\*\*

定位放射線治療専用機Novalisによる肺病変に対する体幹部定位放射線治療症例は本年5月末で約200例となった。今回は2007年2月末までに根治的、あるいは準根治的定位放射線治療を施行(開始)した136例、144病変の解析を行った。当院ではcoplanarの1アーク治療を主体に行い、線量は48Gy/4回を基本的として行っているが、危険臓器に近接する病変の場合には60Gy/8frを採用している。肺門部病変に対しては55Gy/10回を行ったが、2例に再発を認めたため、現在では肺門部病変に対しても60Gy/8回で行っている。奏効率は80%(115/144)で、144病変のうち7病変(4.9%)で局所再発を認めた。1年生存率95.7%で、有害事象については1例にgrade5の肺毒性を認めたが、殆どの症例はgrade0~2であり、許容される治療方法と考えている。

## 11 ノバリス時代の転移性脳腫瘍治療選択

高橋 英明・吉田 誠一・松本 康男\*  
 杉田 公\*

県立がんセンター新潟病院脳神経外科  
 同 放射線科\*

ガンマーナイフによる定位放射線手術(SRS)は転移性脳腫瘍の治療戦略を大きく変えた。また、ノバリスによる定位放射線治療(SRT)が加わって今また治療選択が変化しつつある。この2年間に当科において診断された転移性脳腫瘍症例がどのような治療選択が行われたかを調査した。

症例は203例で、その原発巣は肺87例、乳腺53例、大腸18例、上部消化管15例、泌尿器系8例、造血器8例、頭頸部その他9例、原発不明5